

「イエスの仲間であると言ひ表す」という小標題が掲げられた大変短い箇所です。しかし、短い中にも結構複雑な伝承過程を経て編集されているのです。マタイは「だから」(32)という言葉で以て先行の16～31節に記した伝道者たちへの迫害の厳しさを叙述にうまく接続しています。そして、いかに苛酷な状況に陥ったとしても、そこで諦めてすべてを放棄してしまわないようにと勧告して行くのです。それは「あなたは何に所属し、何処に帰属すべきなのか」という問いと答えなのです。

同様の箇所がルカ12:8-9にあることから、この記事はQ資料に依存していることが分かります。この資料には「人の子」という古い伝承があったのです。ルカではこの「人の子」と「神の使い」が登場します。ここでは「人の子」とは終末的審判者であり証言者なのです。つまり、ルカはイエスと「人の子」を並列表記はしていても、まだ同一であるとは記しませんでした。類似のマルコ8:38でも同様です。

しかし、これらの古い伝承に対し、マタイは「人の子」とはイエスのことであると同一視する方向で本日の箇所をまったく新しく書き換えたのです。そのため「人の子」や「神の使い」という文言をすべて省略してたいへんシンプルに「イエス」と「神」(=天の父)という誰もが分かり易いように明確化してゆきます。

ですから、イエスに対する現在の「わたしの態度」が、終末における「わたしの立場」を規定することになると述べ、地上における裁判の場面と天上におけるイエス(=人の子)による裁判の場面が結びつけられているのです。

それでは地上で功績を積むことが第一義なのかといえば決してそうではないのです。それは16-31節で記されるように「迫害が厳しかったら逃げ出しても構わない」という初代教会の伝道方針と異なってしまいます。そうではなく、マタイが主張するのはイエスの主権が現在と未来を一貫して貫いているという確かさなのです。現場で働く伝道者たちにとってはその貫徹こそが何よりも必要だったということでしょう。そのため紛らわしい「人の子」理解をイエスと同化させてしまったというわけなのです。

孤立無援で迫害を受けていると思える時でも、それが決して最後の場面ではないという信仰と希望と愛こそがイエスであり、実際の伝道という場で彼らが出会う人々への人間理解の根底であることをマタイは宣言するのです。

わたしたちは信仰・希望・愛というものが生活の基本であることを知っています。しかし、それがどのようにして誕生したかは知らないのです。それは絶望と徒労に明け暮れた当時の伝道者たちへのイエス理解だったのです。信仰・希望・愛とはどのような状況にあっても相手をそのままに受け入れる開いた心のことなのです。開いた心は神を受け入れて信仰となり、隣人を受け入れて愛となり、自分を受け入れて希望となるのです。その開いた心とは、自分で完結しようとしなない心です。自己完結しては人生の大切な部分を失ってしまうことに気づいている心です。

当時の緊迫した社会にあって、マタイはそのようにわたしたちが何に所属し、何処に帰属すべきかを明らかにしたのです。それは現在から未来に至るまで首尾一貫した信仰・希望・愛というイエス理解の大胆な提案だったのです。